

年 組 名前:

長谷寺(南ア) 33年ぶり本尊開帳へ

観音信仰の歴史学ぶ

住民向け講座 本堂見学も




南アルプス市榎原の長谷寺(山崎崎璋住職)は26日、33年に一度とされる本尊「木造十一面観音菩薩像」の開帳に向けて、寺の歴史を学ぶ講座を開いた。同市教委の担当者が観音の信仰の歴史などを解説した。(桑原久美子)

本尊の木造十一面観音菩薩像は、平安時代(11世紀後期)の作とされる。近世の記録によると、33年に一度開帳して、前回は1991年。次回は来年3月16、18日に予定している。

1524年に再建された本堂(重要文化財)が500周年を迎えることから、寺の歴史を地域の人に紹介しようと企画した。

市教委文化財課の斎藤秀樹さんが講師を務めた。寺の周辺では平安時代の集落跡や牛馬の骨などが出土した遺跡が見つかっていて、「古代牧を営んでいた人々の信仰が受け継がれていると推測できる」と説明した。

近世から近代には、馬の守護と雨乞いの祈りがさげられ、特に在家塚や小笠原など一原七郷と呼ばれる地域を中心に、干ばつ時に雨乞いの祈禱が行われるなど、「原七郷の守り観音」として広く信仰されてきた」と話した。

信仰が薄れたことを背景に、戦後間もなくの物資や人材が不足している1947、50年、本堂の解体・改修が実現したことを紹介した。本堂や境内の見学会もあった。

戦後すぐに解体、修復された本堂を見学する参加者らも、いずれも南アルプス市榎原

33年に一度のご開帳を前に寺の歴史について学んだ講座

(2023年11月27日付 山梨日日新聞17面)

問1 南アルプス市の長谷寺は、33年に一度とされる本尊の開帳に向けて、講座を開きました。

開帳となる本尊の名称を教えてください。

.....

問2 次の開帳は、いつを予定していますか。

.....

問3 本尊は、近世から近代には、何観音として信仰されていましたか。

.....